



TITLE:

資料紹介(2) : 附属図書館蔵 清家文庫について

AUTHOR(S):

CITATION:

資料紹介(2) : 附属図書館蔵 清家文庫について. 静脩 1984, 20(2): 5-6

ISSUE DATE:

1984-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36924>

RIGHT:

附属図書館蔵 清家文庫について

1: 清家について

天武天皇の皇子舎人親王には貞代王と御原王の2王子があり、貞代王の孫通雄^{キヨツラ}、御原王の孫夏野^{ナツノ}のいずれを清家(清原家)の祖とするか、をめぐって二つの説がある。いずれの説も、王子の臣籍降下に際して時の天皇から清原の姓を賜わったことになっているが、後者の夏野は、『日本後紀』、『^{リョウノギ}令義解』の撰述にたずさわり、左近衛大将、大納言を経て右大臣に進み、世に双岡大臣と呼ばれた人である。一方、『読史備要』所収の清原氏系図は、前者貞代王の孫通雄を祖とする説をとり、通雄の孫房則からあとは両説とも全く同じ人名配列になっている。この房則に2人の男の子がいて、第1子を業恒^{ナリツネ}、次子を深養父^{フカヤブ}とあったが、この深養父の孫は歌集『元輔集』をのこした有名な宮廷歌人清原元輔^{モトスゲ}であり、その子が『枕草子』の作者清少納言である。本稿で紹介する清家は、この深養父の兄業恒の系統で、こちらは宮廷の儒学者として名を残すことになる。この業恒から6代後の頼業^{ヨリナリ}は、官位こそ大外記^{ミヨウギヨウノハカセ}、明経博士どまりであったが、政治的識見にすぐれ、九条兼実、源頼朝に重用されて、当時の政策決定の殆んどすべてに彼の政見が用いられたといわれている。文治5年(1189)に没したあと、車折明神^{クルマセアキミ}として神に祭られ、後世儒学の祖師と尊崇されたが、儒学者でありながら神に祭られたのは、頼業と菅原道真^{ミヨウギヨウノハカセ}だけであり、清原家の中興者といわれる所以である。

頼業から11代目、清家21代の業忠は、後小松天皇に儒学を以て仕えて侍読となり、明経博士、正三位大藏卿に進んだが、当時すでに清原、菅原の両家が学者公家として公認されていたようである。そして業忠の孫宣賢^{ノブエダ}に到って一世の傑儒と呼ばれ、世に清原家学と称されるものは、この宣賢の著録するところが中心となっているのである。宣賢は清原の生れではなく、唯一神道で有名な従二位神祇大副吉田兼俱の第3子に生れて清原家を

嗣いだ人であったが、若年より儒学をよくし、当時第一流の文化人公卿といわれた山科言繼^{ヤマシナノトキツグ}の師ともなり、官位は大炊頭から侍従に進んで正三位となった。天文19年(1530)、越前の守護朝倉氏の許で薨じたのであるが、儒学、国学の学究として清原の名を一層高からしめたのであった。環翠軒と号し、子弟に教授するに際して、五経、論語には専ら古註(漢・唐時代の注釈)を用い、また『日本書紀』や『職原抄』などの国語関係も講義した。この宣賢の作り用いた進講用のテキストや注釈書は、本館所蔵の清家文庫中、最古の集書となっており、またこの文庫に最も大きな価値をもたらしている。

宣賢から4代あとの秀賢の時、船橋姓を用い始めたので、以後は先の宣賢をも船橋宣賢と呼ぶようになった。秀賢も漢籍に精通し、学才のほまれが高かったが、慶長19年(1614)40才で没したので、官位は従四位上、式部少輔、明経博士で終った。その日記『慶長日件録』は有名である。

秀賢の次男賢忠は船橋^{フネハシ}から別れて、はじめ東高倉を称し、のちに伏原^{フセハラ}の姓をたてたが、この家も、以来儒学をもって宮中に仕え、賢忠とその子宣幸は、天皇や東宮に進講して恩賞を受けている。

宣幸の孫、宣條^{ノブエダ}は古注学の祖といわれ、多くの門人を輩出したが、自分は後年竹内式部の門に入って垂加神道を学んだ。官位は正二位に昇り、明経博士であった。

以上述べた如く、清原家(船橋、伏原も含めて)は歴代明経博士に任じ、大学寮で経書を講究して天皇、親王以下宮廷の人々に講義することをもって仕えた学問の家柄であり、俗に「明経の家」と呼ばれていたが、これに対して、詩賦と歴史の講究をもって文章博士^{モンジヨウノハカセ}を独占したのが、菅原、大江の両家であった。

2：本館所蔵の清家文庫について

わが国で清家本と呼ばれるコレクションは、本館以外に、国立国会図書館、東洋文庫、大東急記念文庫、宮内庁書陵部、天理図書館などに所蔵されているが、本館のそれは、今次大戦後の昭和26年から同28年にかけての3年間にわたって、船橋家の第39代当主で、元子爵の清賢氏から直接寄贈を受けた2,365冊と、そののち同家から購入した『清家家学書34種』（すべて重要文化財に指定されており、中には旧国宝も含まれる）を中心とした289冊を加えたものであるから、これこそ質量ともに日本一の清家本のコレクションであると誇るに足るものであり、このことは学界においてもつとに喧伝されているところである。

上述した重要文化財指定書のうち、『紙本墨書孝経述義』は、巻1、2の見返しに「明応6年(1497)」という記入があり、第24代良雄（業賢）の筆になる。同じく『紙本墨書中庸朱熹章句』は「弘和2年(1382)栄山寺行宮に於て隠士禅惠書写」の奥書きがあり、これと『周礼疏』第1～4、7、8、12～14、18～40巻単疏本（単疏本とはこの『周礼疏』の場合、『周礼』の本文や、基本的な注釈を省いて、書物全体がよりくわしい注釈のみからなっているものをいう）を合せた以上3点が旧国宝に指定されていた稀覯本である。

この他、宣賢自筆の『尚書聴塵』、『大学』、或いは清家累代の家訓として伝えられた延文元年(1356)10月の奥書のある『古文孝経』など、宣賢の進講本をはじめとして、一門の講説、書入れ本など、南北朝より室町中後期にいたる時代の貴重な原本が集大成されている。

上に紹介した一門の自筆書写本のみならず、刊本にも見落せないものが多く、例えば、慶長、元和年間に出版されて、世に「本能寺前町版」と名付けられた片仮名まじりの木活字版『孟子抄』、『毛子抄』など、愛書家が垂涎を禁じ得ない珍籍も含まれている。

限られた紙数から、ほんの一部を紹介したにすぎないが、本館の清家文庫が、わが国の近代化以前の思想上にあまりにも大きな位置を占め続けた儒学の研究に際して、欠くべからざるものである

ことを感じられるであろう。当時の天皇を頂点とする宮廷公卿たちの学んだ教養の質と方向を如実に物語る生の資料として、或は、当時の経書の韻学訓詁の重要な資料として、今後とも学界に貢献するところは大であると考えられている。

(附属図書館 廣庭基介)

清原氏系図（『読史備考』より）

